



第37回 日産 童話と絵本のグランプリ

ながみちくんがわからない

かず い よし はる
数井 美治

わり算は、わりきれの方が好き。
4÷2=2なんて最高だ。
反対に、わりきれないのは、気持ちわるい。「あまり」が出るのはむずむずする。

でも、3とか7のような、わりきれない男の子がいる。
同じクラスの長道くんだ。
ふまじめで、授業中に平気でマンガを読んだりするくせに、給食の時間、ともだちの苦手なおかずを食べあげたり、教室の花びんに、そっと花をかざったりしている。
何を考えているのか、さっぱりわからない。
わからないって、気持ちわるい。
だからわたしは、長道くんを研究している。

放課後のチャイムがなって、みんなが教室を出ていく。
長道くんが背負っているランドセルは、ほうれん草みたいな色だ。めずらしい

色だから追いかけてやすい。
長道くんは靴をはくと、傘立ての下をごそごと探って、石を取りだした。
どこにでも転がっているような、灰色の石だ。

長道くんはそれを地面に置くと、石をけりながら歩きはじめた。
石をけつとばして、コロコロコロ……と転がったさきまで追いかける。
そこからまた、石をけつとばして、コロコロコロ……。

石はまっすぐに進むときもあれば、横に飛んでいってしまうこともある。
だからむだに行ったり来たりすることになる。
なんのためにやっているのか、さっぱりわからない。
名前が「長道」だから、帰り道もわざわざ長くしている……ってことはないよね。

「そんなところで何してんの？」
電柱のうしろにかくれていたわたし

に、長道くんが言った。
しまった。さすがにあやしすぎたみたい。

こうなったら、ひらきなおるしかない。
「しかたないでしょ。長道くんが、ちゃんとまっすぐ歩かないからだよ！」

「いや、おれがまっすぐ歩かないのと、電柱のうしろにかくれるのと、なんの関係があるんだよ」

「まっすぐ歩かないから、すぐに追いついやうんだよ！」
「追いついていけばいいだろう……」

長道くんはあきれ顔だ。
長道くんにあきれるなんて、なんだかなつとくがいかない。

「あ、もしかして」
ぼん、と、長道くんが手をたたいた。
「おれを追いこしちゃいけないってルールなのか？」

「ルール……？」
そんなもの、ない。けれどわたしはとつさに、あるということにしようと思つた。

「うん、そう。そういうルール」
もごもごとうなずくと、なぜか長道くんの目がぼつとかがやいた。

「そっか。おれの今のルールはこれ」
長道くんが、足もとの石をひよいと拾いあげた。

「やっぱり、どこにでもある、ただの石だ。」
「この石を、学校の行き帰り、なくさないようにけりつづけるんだ。どつかに落したり、見失ったらゲームオーバー」

なるほど。だから、新しい石に取りかえたりせずに、あっちへこっちへ追いかけていたんだ。

ようし。ひとつ、研究の結果が出た。
でも、まだ大きな謎がのこっている。
そんなことして、何になるの……？

石をけるたび、ほうれん草色のランドセルがカタカタと鳴る。
「あつ、しまった。脱線した！」

そういつて、長道くんがよその家の

生垣に石をけりこむのは何度めだろう。

長道くんの石探しを待ちながら、わたしは今が夏じゃなくてよかったと心から思つた。

もし真夏だったら、とつくに熱中症になつていただろう。
「まだ見つからないの？」

さすがに、ちよつとつかれてきた。
わたしは道路のブロックにすわって、ぼんやりと空を見上げた。

うす青い空に、うろこ雲がうかんでいる。
そこへ柿の枝がひろがって、オレンジ色の実がやつやと光っていた。

「あの柿、おいしいのかなあ？」
「たぶん、渋柿だろ。あまかったら、とつくにカラスに食われてるよ。それより、ちよつと手伝つてくれない？ 石がなかなか見つからないんだ」

「だれかに手伝ってもらうのは、ルール違反にならないの？」

「一回かぎりなら、オーケーなんだ」
それつてぜつたい、今考えたでしょ？

と言いたかったけど、待つてるだけはヒマなので、手伝ってあげることにした。「本当に、ここに入ったの？」わたしは長道くんのとなりにしやがみこんだ。

「うん。たしかに見た」
「でも、見当たらないよ」
地面は枯れかけの雑草と落ち葉でおおわれていた。もしかしたら、虫がいるかも？

おっかなびつくり、棒でつきまわしている、木の葉の下から、見おぼえのある石が顔を出した。

「あつ」
秋の空に、声がかさなつた。
ぱつと手をのぼすと、長道くんも手を出していた。

ふたりの手が、ちよんとぶつかった。長道くんの手は、ひんやりしていた。「よかった。あと一歩つてところでゲームオーバーになるとこだったよ。サンキューー！」
あわてて手をひっこめたわたしに、

長道くんが笑いかけた。
「ど、どういたしまして」

わたしはその顔を、まっすぐに見ることができなかった。

「さあ、ラストスパートだ」
長道くんはそう言つて、また石をけつた。
空はだんだん、あかね色になりつつある。

いつしかわたしは、どうか変な方向に飛んでいきませんように、ととなりで手を合わせるようになっていた。

長道くんがけつた石が、水切りみたいは何度かはねて、マンシヨンの駐車場の前で止まつた。

「ゴール！」

長道くんが、ガッツポーズを決めた。

「おれんち、ここなんだ」

「……へえ。そう」

さつきまでは、変な方向に飛ばさないで！なんて思つていたのに。あまりにあっけなく終わってしまったので、

なんだかものたりないような気持ちだつた。

「じゃあな！」

にかつと笑つて、長道くんはマンシヨンに入つていこうとする。わたしはあわてた。

「待つて！石は？」

転がったままの石を指さすと、
「ああ、あの石？あれは、もういいんだ。もうクリアしたから。今度はまた、別の石を見つけるよ」

「はあ？」

やつぱり、長道くんはわけがわからない。

あんなに何度も、追いかけてたり探したりして、大事にしていたのに。もういないなんて。

「あのさ、長道くん。……そんなことして、何か意味があるの？」

わたしはつい、正直に聞いてしまった。研究者失格？

だって、いくら考えてもわからないんだから、ゆるしてほしい。

長道くんの答えは、あつさりしていた。「意味？そんなのないよ。なかったらだめなの？」

あまりにどうどうと言うので、まるでわたしの方がはずかしいことを聞いたみたいだった。

わたしはなにも言えなくなつた。

長道くんも、なにも言わなかった。でも、すこし困つたような顔をして、「じゃあ」と小走りで石を拾いにいった。

「これ」
長道くんはわたしの手に石をにぎらせた。

「気になつてるなら、あげるよ」

わたしが返事をしないうちに、長道くんは手をふつて、マンシヨンの自動ドアのむこうに消えてしまった。

のこされた石ころを、わたしは見つめた。

「べつに、石がほしかったわけじゃないのに」

やつぱり、長道くんはよくわからない。3とか7とか、わりきれない数字み

たいでむずむずする。

この石も、今日のできごとの「あまり」みたいだ。

「こんなもの、もらつてもこまるよ」

わたしは石を放り捨てようとして、肩から上に手をあげた。

でもついに、投げることができなかった。

にぎりしめた石は、長道くんの手みたいにひんやりしていた。

審査員コメント

「そんなことして何になるの？」と言われても、子どもは平気です。損得は関係ありません。楽しいからするのです。そんな男子の行動を女の子の視点からユーモラスに描いています。一人称のリズム感あふれる文章が、動きの多い作品を支えています。

吉橋 通夫

数井 美治

34才 主婦 千葉県香取郡

受賞のことば

庭先で、冬を越せなかったミモザが枯れました。枯れる花もあれば咲く花もあると感じる春です。この度は、すばらしい賞をありがとうございます。これからも、自分自身が納得できる作品づくりを続けていきたいです。受賞の記念に新しい苗を買おうと思います！

